

[学会]

第592回 千葉医学会例会
第14回 佐藤外科例会

日 時：昭和53年12月16, 17日

場 所：千葉大学医学部附属病院第1講堂

1. 病巣の大部分が食道を占める食道胃接合部腺癌の1例

上田源次郎 (千大)

患者は52歳男性。胸部下部・腹部食道腺癌の診断で、左開胸胸腔内食道胃吻合術を施行した。癌腫は隆起型で3.3×1.9 cm (食道3 cm, 胃0.3 cm) であった。教室の食道胃接合部癌検索例321例のうち、E>Cの腺癌で本症例のごとき10:1の比率を有するものは少なく、321例中0.62%というきわめて稀な症例であった。

2. 乳房・胆管同時性重複癌の1例

榎本和夫 (千大)

症例は77歳の女性。主訴は右乳房腫瘍である。昭和53年7月、右乳房腫瘍に気づき、9月13日、根治的乳房切除術施行。髄様腺管癌であった。術後黄疸が出現し、PTCにて肝門部胆管癌の診断のもとに11月15日、肝右葉切除術施行。乳頭腺癌であった。第4病日に死亡した。剖検で死因はDICと判明した。本例は1943年以降、第2例目と思われる。

3. 著明な臍静脈隆起を示した Cruveilhier-Baumgarten 症候群の1例

荻野幸伸 (千大)

症例は63歳の女性。主訴は吐血。臍ヘルニアを伴う著明な臍静脈隆起、静脈性雑音、脾腫、食道から胃噴門部に亘る高度の静脈瘤を認めた。臍静脈は造影により著明な拡張蛇行を示した。食道粘膜離断術により静脈瘤は消失し経過順調である。なお、術中門脈圧は310 mmH₂O、脾重量は1120 g、肝組織像は軽度線維化であった。

4. 潰瘍を伴う Barrett 食道の1例

織田成人 (千大)

61歳女性。主訴嚥下困難、X線上、下部食道の潰瘍、食道裂孔ヘルニアを認め、内視鏡では、上門歯から30 cm

より肛門側は胃粘膜類似の粘膜で被われ、この部の病理組織は残存せる扁平上皮を囲んで高円柱上皮で被われており、潰瘍を伴う Barrett 食道と診断された。右開胸胸部食道噴門切除胸骨後食道胃吻合術を施行し経過良好である。

5. Elemental diet により治癒せしめえた難治性消化管瘻の1例

北川 素 (千大)

16歳女性。2年前食道静脈瘤にて吐血し、食道粘膜離断術を施行。術後縫合不全を起こし、胃噴門部皮膚瘻を形成した。EDの単独投与により瘻孔を治癒せしめえた。EDを1日最高3000カロリー投与し、体重は3.5 kg増加し窒素・電解質バランスはとれていた。患者は苦痛を訴えることなく、下痢等の副作用も認めなかった。

6. 肝門部胆管が閉鎖し、右副肝管が十二指腸へ開口する胆管奇形の1治験例

高崎英己 (千大)

患者は49歳の女性で、主訴は黄疸。20歳頃より右季肋部痛をくり返し、胆道精査にて胆管奇形による閉塞性黄疸との診断で、胆管空腸 Roux-Y 吻合と、右副肝管 Tチューブドレナージを施行、術後2週目に退院した。肝外胆道系奇形本邦報告例612例のうち、胆嚢欠損症42例の検討と、副肝管22例をⅢ型に分類した。

7. 食道静脈瘤術後に合併せる食道癌の1治験例

永田松夫 (千大)

53歳男性。主訴通過障害。現病歴、52年12月肝硬変性食道静脈瘤の診断で食道粘膜離断術施行。術前より軽度の通過障害があったが術後も消失せず、53年3月の食道X線でEiImに食道癌を発見さる。生検で扁平上皮癌。4月右開胸胸部食道全摘頸部食道外瘻胃瘻造設術施行。術後肺炎を併発したが無事退院。病理組織所見では中分化型扁平上皮癌、a₂, n(-), lyv(+) であった。